山田みやこの活動報告

令和元年6月15日(金)・16日(土)

第6回性暴力救援センター全国研修会に参加

～性暴力被害者支援のためのワンストップセンターとは　その現状と課題～

会場　大阪市マイドーム大阪

〈1日目〉

今回初めて内閣府男女共同参画局推進課 暴力対策推進室長が参加され、DV・虐待被害者支援をしている民間団体への支援拡充と性暴力救援センターの質の向上のために力を入れると報告あり。

被害者支援をしている弁護士の吉澤 尚美氏は、各県のワンストップ支援センターの病院拠点型は全体の22%、連携性78%。病院拠点型が望ましいが課題もある。病院とセンターの職務の兼務、医療報酬が性暴力支援に反映されない、精神的支援に対応できる医師の確保・養成が難しい、国からの財政的支援など。ワンストップ医療機関として高く評価する政策が必要と報告。

連携型から病院拠点型へ移行する沖縄県立中部病院 三浦 耕子医師は、連携型で4年間被害者の様々な現実に向き合い、連携が必要な組織と関係づくりができ、小児科医との関わりも深まり4年間は無駄ではなかったと報告。

〈2日目〉

各県に最低は1ヶ所設置とされたワンストップ救援センターが現在全国に設置された。その内の35センターから現状の報告がなされた。本県の済生会宇都宮病院に設置された「とちエール」も報告された。

更に性暴力救援センター大阪「SACHICO」の加藤治子代表は、性虐待被害児の低年齢化が進んでいると報告。

幼児期から家の中で性虐待が起きている。加害者は実父・実兄・義父など。児童相談所・警察・検察の三機関が被害児の意思や気持ちを尊重し、心理的負担を緩和するため事情聴取に共同で立ち会うことになってから、少しづつ加害者の逮捕が増えてきた。

子どもを取り巻く環境が悪化しているため、ますますワンストップ救援センターの果たす役割が拡大されている。質の向上が更に求められる。